

プロダクション・コードと『黄昏』における不道徳の表象

五十嵐 拓也

ウィリアム・ワイラー監督のアメリカ映画『黄昏』(Carrie, 1952)は、1900年に刊行されたセオドア・ドライサーによる小説『シスター・キャリー』(Sister Carrie)を翻案した作品である。

自然主義文学として名高いこの小説は、過去にも複数回にわたって映画化が試みられた。しかし、1930年から1934年までに確立していたプロダクション・コードによって映画化は検閲に晒される。小説の出版段階において幾度となく、検閲を受けてきた『シスター・キャリー』は、再びハリウッドで自主検閲を受けることになるのである⁽¹⁾。そして重婚と自殺を含む物語はプロダクション・コードに抵触し、脚本製作の段階で挫折している。

初めて映画化に漕ぎつけた『黄昏』では、プロダクション・コードを公然と無視して、主人公ハーストウツの自殺の場面が撮影されたと伝えられている(Herman 327)。しかし、この場面はスタジオによって最終的に削除されてしまったという。ワイラー自身の証言によれば、文化的な教養人として振る舞い続けるハーストウツが困窮する『黄昏』において、自殺という結末は、実直な市民の日々の努力を否定するような印象を与えかねなかった(330-331)。そのため、『黄昏』を製作したパラマウントは、『ローマの休日』(Roman Holiday, 1953)の撮影でワイラーがローマに滞在している間に自殺の場面を削除し、当時の極端な愛国主義者からの批判を避けようとした。

ワイラーの過去作品『我等の生涯の最良の年』(The Best Years of Our Lives, 1946)が一部で共産党のプロパガンダ映画とみなされたことや、ドライサーが死の直前の1945年に共産党に入党していた事実を考えると、赤狩りの影響をスタジオが恐れた可能性は十分あり得るだろう(高村39)。

『黄昏』に関しては、プロダクション・コードの実行組織である映画製作倫理規定管理局(Production Code Administration、以下PCAと略称)による検閲の記録が残されている。この一次資料を調査した結果、自殺の扱いを変更した修正稿が再審査で承認を得ていたことがわかった。自殺以外に重婚や婚外交渉(Illicit Sex)に関する修正も加えられており、本作品の製作過程にプロダクション・コードが与えた影響は明らかである。

そこで、本論文は、『黄昏』に対するプロダクション・コードの影響を考察し、PCAによって不道徳性が問題視されていた自殺や重婚、婚外交渉の描写がいかなる変容を遂げたのかという視

点から、プロダクション・コード下での製作実践の詳細を解き明かす。第1節では『黄昏』に対する検閲の影響に関する議論を振り返る。第2節では、『黄昏』以前に原作の映画化を試みた各スタジオに対する検閲記録を時系列に則して整理し、検閲で問題になった内容を確認する。第3節と第4節では、パラマウント社とPCAの間で行われた検閲記録を参照しながら、ニューヨーク公共図書館パフォーミング・アーツ分館とカリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles、以下UCLAと表記）に収蔵された脚本資料を活用し、本作の脚本の生成過程を分析する。特に第3節では本作が自主検閲で問題視された婚外交渉と重婚を、第4節では自殺を含む一連のシーンを考察していく。

『黄昏』のあらすじは、以下の通りである。

ミズーリから大都会シカゴへ姉を頼って働きに出たキャリア・ミーバー（ジェニファー・ジョーンズ）は、工場での作業中に負傷し、車で出会ったセールスマンのドルーエ（エディ・アルバート）を頼らねばならなくなる。ドルーエは、キャリアを自分のアパートに迎えて同棲を始めるが、正式な結婚を願うキャリアをはぐらかし続ける。一流の料理店フィッツジェラルドの支配人ジョージ・ハーストウッド（ローレンス・オリヴィエ）は、冷たい妻のジュリア（ミリアム・ホプキンス）に悩みながらも幸せな家庭を営んでいる。ある日、ハーストウッドは、ドルーエの仲介でキャリアに出会う。ドルーエの目を盗んで逢瀬を重ねようになった二人は、ついに結婚を決意する。ハーストウッドは離婚の意思を固めるが、ジュリアは離婚に同意しない。キャリアと夫の逢瀬を知ったジュリアは、ハーストウッドが勤める店の経営者フィッツジェラルド（ベイジル・ルイスデール）に相談し、キャリアとの破局を促すべく毎月の給与をハーストウッドの自由にさせないことを決める。フィッツジェラルドとジュリアの制裁に困惑したハーストウッドは、偶然所持していたフィッツジェラルドの店の金を盗み、キャリアとニューヨークに駆け落ちする。駆け落ちした二人は、徐々にその日の生活にも困るようになり、キャリアの流産をきっかけに破局を迎える。キャリアはその後、役者の職を得てスター女優として出世していく。一方、ハーストウッドは住む部屋を失い、簡易宿泊所に寝泊まりする浮浪者になってしまう。食べることに事欠くようになったハーストウッドは、出世したキャリアに施しを求める。離別をきっかけにハーストウッドが困窮していったことを離別後に知ったキャリアは、自分を支えたハーストウッドに恩を返すべく、共に暮らすことを提案する。だが、ハーストウッドはその申し出を無視し、キャリアの財布からわずかな小銭を得て去ってしまう。

1. 『黄昏』の製作と赤狩り

『黄昏』の製作が始まる7年前、1940年6月のニューヨーク・タイムズ紙は、既に『シスター・キャリア』の監督がワイラーになったことを見出しで取り上げている（Churchill）。記事では、『市民ケーン』（*Citizen Kane*, 1941）のカメラテストにルース・ウォリック⁽²⁾が起用されたことも紹

介しながら、RKO社が『シスター・キャリー』の監督としてワイラーをサミュエル・ゴールドウィンから借りようとしていると伝えている。ワイラーは当時『月光の女』(The Letter, 1940)をワーナー・ブラザーズ社で監督しており、『シスター・キャリー』でも別のスタジオに出向する形で監督を担うことが想定されていたのかもしれない。しかし、現存する資料からは、ニューヨーク・タイムズ紙の報道を裏付ける記述を確認できない。また、第2節で後述するが、RKO社は1944年に脚本の検閲を受けている。ワイラーは、1944年にヨーロッパ戦線に従軍していたことから、RKO社が脚本を提出した際には関与していなかっただろう。しかし、ワイラーが少なからず原作に関心を持っていたことは、9年後にプロデューサーを兼任する形で監督を務めたことから明らかだろう。

ワイラーは当初、『黄昏』の脚本家にリリアン・ヘルマンを想定し、1947年6月にヘルマンへ依頼する手紙を送付している(Herman 318、以下はページ数のみ表記)。しかしヘルマンが多忙により脚本を担当できなかったため、最終的な脚本家として『女相続人』(The Heiress, 1949)のルース・ゲイツとオーガスト・ゲイツ夫妻を選定している(319)。そしてゲイツ夫妻が執筆した脚本は、ハーストウッドの自殺の扱いがPCAによる検閲で問題とされたという(327)。しかしワイラーは、ハーストウッドの自殺が無ければ映画の劇的な衝撃が失われると考え、自殺のシーンを断固として撮影することを決意した。こうして撮影を終えて、作品の最終編集は1951年3月に実施された(330)。だが作品は、パラマウントの重役の判断で1952年7月に公開延期となり、『ローマの休日』の撮影中でワイラーがイタリアに滞在している最中に再編集が行われ、自殺の描写が削除される。

ワイラーは、評伝を執筆したアクセル・マドセンとの手紙の中で、ドライサーの原作が映画化の約40年前の作品だったとしても、愛国主義者たちに「『黄昏』が非アメリカ的」で、「アメリカにとって良くない」と言われただろうと回想する(330)。さらに、以下のように述べている。

我々は、ローリィ(ローレンス・オリヴィエ)の素晴らしい演技のおかげで、かなり強烈な自殺のシーンを撮影していた。だが、映画からは削除されてしまった。『黄昏』が不幸な物語であることは事実だ。憂鬱にさせる物語『だった』し、成功とは無縁の物語だったのかもしれない。しかし、最終的に取り除かれたことで、何百万もの人々が見なくなってしまった(330-331)。

ワイラーの評伝を執筆したジャン・ハーマンは、自殺の削除によってワイラーが本作を失敗作と位置づけていたと論じる。しかし自殺が問題となったPCAの検閲については、詳細に論じていない。

作家主義の観点からワイラーの作品を論じたマイケル・アンデレグは、ニューヨーク公共図

書館に収蔵された『黄昏』の脚本を調査している (Anderegg 165-167)。アンデレグは、ワイラーの発言を引用して自殺の削除に触れているが、実際の脚本上での自殺の扱いについて言及していない。

ドライサーの研究者スティーヴン・ブレナンは、『シスター・キャリー』の映画化に関する論考の中で、『黄昏』以前の『シスター・キャリー』に対するPCAの検閲に言及している。特にペンシルバニア大学図書館に収蔵されたドライサー・コレクションを調査し、PCAのジョゼフ・グリーンが各スタジオに送付した手紙を紹介している⁽³⁾。具体的には、1938年にコロンビア・ピクチャーズが『シスター・キャリー』について問い合わせた際に、ワーナー・ブラザーズのジャック・ワーナーに前年送付した手紙を同封した旨が記されている (Brennan 187)。PCAのグリーンは、ワーナーに送付したこの手紙の中で、不道德な女性とハーストウッドの自殺を問題視していた。だが、ブレナンもその他のスタジオに対する検閲結果を考察していない。そこで次節では、『黄昏』を製作したパラマウント社以外のスタジオによる『シスター・キャリー』の検閲結果を時系列順に辿り、PCAでどのような内容が問題となったのかを改めて明らかにしていく。

2. 『シスター・キャリー』に対する自主検閲

『黄昏』に関する検閲の記録には、『シスター・キャリー』の映画化に関する過去の記録も含まれている⁽⁴⁾。それらは、各スタジオが提出した簡単なシノプシスやPCAの上部組織に当たるアメリカ製作者配給者協会 (Association of Motion Picture Producers and Distributors of America, Inc. 以下、MPPDAと略称) に送られてきた手紙、それに対する返信である。以下に、30年代から40年代にかけて交わされた手紙の日付とその概略を記す。

- ① 1935年8月27日 パラマウント社の社内通信。『シスター・キャリー』のあらすじをMPPDAに送付する旨が書かれている。
- ② 1935年8月28日 パラマウント社のジョン・ハムレットからのMPPDAのジョゼフ・グリーン宛の手紙。シノプシスの検閲依頼。
- ③ 1935年8月30日 MPPDAのグリーンからパラマウント社のハムレット宛の手紙。シノプシスの検閲結果。
- ④ 1935年9月10日 MPPDAのウィル・H・ヘイズからパラマウント社のアドルフ・ズーカー宛の手紙。検閲結果を送付した3作品を通知。『シスター・キャリー』は8月30日に送付。
- ⑤ 1937年10月6日 ワーナー・ブラザーズ社のウォルター・マックイーンからグリーン宛の手紙。グリーン所属機関名は明記されていない (以下、所属機関名が明記されていない場合はグリーンの名のみ記す)。シノプシスの検閲依頼とシノプシス。

プロダクション・コードと『黄昏』における不道德の表象

- ⑥ 1937年10月11日 ブリーンからワーナー・ブラザーズ社のジャック・ワーナー宛の手紙。シノプシスの検閲結果。
- ⑦ 1937年10月20日 MPPDA のヘイズからワーナー・ブラザーズ社のジャック・ワーナー宛の手紙。検閲結果を送付した1作品を通知。『シスター・キャリー』は10月11日に送付。
- ⑧ 1937年10月26日 ワーナー・ブラザーズ社のウィリアム・レンゲルから MPPDA のグリーン宛の電信。検閲結果の再考を依頼。
- ⑨ 1937年10月26日 ブリーンからワーナー・ブラザーズ社のレンゲルに対する返信の手紙。ワーナーに検閲結果のコピーを直接見ってもらうように返信。
- ⑩ 1937年10月30日 ワーナー・ブラザーズ社のレンゲルから MPPDA のグリーン宛の手紙。検閲結果の再考を依頼。
- ⑪ 1937年10月31日 ブリーンからヘイズ宛の手紙。「社会問題」や「犯罪・ホラー」、「ミュージカル」などのカテゴリーに分けて検閲を行った作品のリストを示している。『シスター・キャリー』は、姦通と婚外交渉の主題で忠告を受けた作品としてリストの後半に書かれている。
- ⑫ 1938年10月31日 コロンビア社のマイケル・クレイクから MPPDA のグリーン宛の手紙。『シスター・キャリー』に関する MPPDA の見解を質している。
- ⑬ 1938年11月1日 ブリーンからコロンビア社のクレイク宛の手紙。ワーナー・ブラザーズに送付した1937年10月11日付けの資料（前述の資料⑥と思われる）を添付し、確認するように求めている。
- ⑭ 1939年5月9日 ユニバーサル社の副社長 D・A・ドーランから MPPDA のグリーン宛の手紙。シノプシスの検閲依頼。
- ⑮ 1939年5月15日 ブリーンからユニバーサル社のドーラン宛の手紙。シノプシスの検閲結果。
- ⑯ 1944年3月30日 ブリーンから RKO 社のウィリアム・ゴードン宛の手紙。送付されたシノプ시스に対する検閲結果。

資料⑫は、ワーナー・ブラザーズ社の検閲結果について問い合わせる内容であり、コロンビアが独自で検閲を受けていないことがわかる。それでも、「ビッグ5」と呼ばれた5大メジャー映画会社と「リトル3」と呼ばれたメジャー映画会社の計8社のうち、5社が関心を持っていたことは興味深い。原作の『シスター・キャリー』は、1930年代後半から各映画会社が注目する小説だったのだ。

各社に対する検閲結果を表す資料③、⑥、⑮では、提出された脚本に対してほとんど同じ文面でプロダクション・コードの規定を侵害していると警告している。最初の検閲結果となる資料③

では、まず主人公のキャリアを問題にしている。以下は、資料③の手紙からの引用である。

シノプシスで明記されるように、物語はプロダクション・コードの規約を完全に侵害している。なぜなら妾 (kept woman) というテーマでありながら、それを相殺する道徳的な価値が全くないからである。

MPPDA は、このテーマに関連した具体的な細部として、未婚のキャリアとドルーエ、さらにキャリアとハーストウッドが犯す婚外交渉を問題にしている。さらに、キャリアとハーストウッドの結婚が重婚であることに警告を加える。

プロダクション・コードの「具体的条項」⁽⁵⁾の第二条「性」の第一項は、「姦通や不義密通 (Illicit Sex) は筋立ての材料として必要な場合もあるが、これを明確に描いたり、正当化したり、あるいは魅力的に示してはならない」(加藤 161) となっている。資料③では、この「不義密通」という用語を使用して警告していることから、この条項に抵触したことを問題視したと思われる。また、重婚についても「具体的条項の根拠」において、第二条の根拠である「結婚と家庭の神聖さを尊重するために、三角関係、すなわち既婚者に対する第三者の恋愛の扱いは注意を要する。これを扱うことによって制度としての結婚に反感を抱かせてはならない」(加藤 172) という項目に反している。

次に MPPDA は、ハーストウッドの罪を自殺によって相殺しようとするあらすじに反対している。特に「映画における犯罪」という当時の規約を引用し、自殺がなぜ問題となっているのかを説明している⁽⁶⁾。以下は、資料③からの引用である。

「自殺」は、上映されたドラマで起こる問題の解決策として、プロットの進行に応じて絶対に必要とされない限り、「道徳的に好ましくなく」かつ「悪い劇」として推奨されない。

資料③の検閲結果では、これら三点の問題からプロダクション・コードに違反する作品と位置づけている。そして後に資料③と同様の通知が他の映画会社に向けて送られていく。

資料⑥のワーナー・ブラザーズ社に対する検閲では、1935年とほぼ同一の内容である。資料⑧が示すように、ワーナー・ブラザーズ社は MPPDA に再考を促すべく抗議の手紙を送付する。しかし MPPDA は、検閲結果が妥当であるという資料⑨を返信する。この結果、資料⑩の「提示された理由に反対して忠告を受けた作品」のリストに『シスター・キャリア』を入れている。資料⑬の RKO に対する検閲結果についても、それまでの文面を踏襲しながら、より強い言葉で「ヒロインが不道徳な女性である」と加筆している。

一方、ユニバーサル社が提出した資料⑭では、あらすじで自殺の描写を予め削除している。そ

のため PCA は、未婚のキャリアとドルーエの姦通と、ハーストウッドによる重婚の2点のみが問題だと指摘している。そして他の検閲結果とは異なり、「さらにこの問題について議論をしたい」と実現を期待する文言が資料に添えられている。この後、この映画の企画は何らかの事情によって頓挫してしまったと思われるが、PCA にとっては他社のシノプシスと比べて最も好ましい脚本案であっただろう。

以上の検閲結果は、不道德な女性として描かれるキャリア、重婚を犯すハーストウッド、ハーストウッドの道徳的な解決策としての自殺、の3点を問題視している。実際に初めて映画として翻案された『黄昏』は、これらの3点に対してどのように対応していたのか。次節ではまず不道德な女性と重婚に対する描写の変化を、検閲資料と脚本から精査していく。

3. 婚外交渉と重婚の修正

『黄昏』の脚本について、ニューヨーク公共図書館パフォーミング・アーツ分館(⑰～⑳)と UCLA スペシャル・ライブラリー(㉑)のそれぞれに所蔵されている資料を時系列順に整理すると、以下のようになる。

- ⑰ 1949年6月6日 脚本原案(Screen Treatment)。49頁に渡って脚本の概要が記載。署名なし。
- ⑱ 1949年8月23日～24日 脚本初稿(First draft screen play)。署名なし。
- ⑲ 1949年9月20日～11月30日 脚本草稿(Yellow script)。オーガスト・ゲイツの署名あり。
- ⑳ 1950年7月20日 最終決定稿(Final White)。キャリアが流産してしまうシークエンスまでを含む。署名なし。
- ㉑ 1950年7月20日～1950年10月27日。最終決定稿。自殺に至る全シークエンスを含んでいる。表紙は「7月20日」となっているが、ページ内の日付は10月27日までの修正原稿を含んでいる。署名なし。

次に製作に関する検閲資料では、『黄昏』の脚本の検閲、修正後の脚本の検閲、試写された作品の検閲、公開後の上映記録、公開後の批評が収録されている。以下は、MPPDA の後継組織アメリカ映画協会(Motion Picture Association of America、以下 MPAA と略称)が本作の検閲を完了した1951年1月17日の資料までの概略である。

- ㉒ 1950年5月25日 パラマウント社の検閲管理担当(Director of Censorship) ルイーゼ・ルカスチ⁽⁷⁾から MPAA のグリーン宛の手紙。脚本の検閲依頼。ワイラーから補足があると説明している。実際のワイラーの補足資料のは、同資料から確認できない。

- ⑳ 1950年6月12日 グリーンからパラマウント社のルカスチ宛の手紙。脚本の検閲結果。5頁に渡って脚本の細部に指摘を加えている。
- ㉑ 1950年7月27日 パラマウント社のルカスチからMPAAのグリーン宛の手紙。1950年7月20日付けの最終稿（Final White Script）の検閲依頼。
- ㉒ 1950年8月3日 グリーンからパラマウント社のルカスチ宛の手紙。検閲結果。基本的な物語がプロダクション・コードの定則に合致していることから、3点の修正のみ要求している。
- ㉓ 1950年8月18日 パラマウント社のルカスチからMPAAのグリーン宛の手紙。1950年8月17日付けの変更された頁について検閲依頼。「次の月曜（21日）に撮影を開始するため、至急の電話をお願いしたい」と書かれている。
- ㉔ 1950年8月21日 グリーンからパラマウント社のルカスチ宛の手紙。修正された60頁分の内容のうち、1頁の箇所を修正するように要求している。
- ㉕ 1950年12月21日 オープニングのタイトルロールの検閲。
- ㉖ 1951年1月10日 オープニングのタイトルロールの記録。㉕と比較して若干の修正がある。
- ㉗ 1951年1月17日 試写後の検閲結果。
- ㉘ 1951年1月17日 検閲で承認されたことを通知する手紙。

まず検閲前の資料⑰は、作品と大きく異なる設定となっている。特に資料⑰の後半部分は、地下鉄の労働争議など、原作小説から着想を得た描写が多く含まれており、小説に類似する形で初期の脚本構想が練られていたことがわかる。

資料⑱と㉑では、原作に後半部が削除され、徐々に最終版に類似した脚本へ変化していく。たとえば資料⑱では、ジュリアが弁護士のオブライアンを伴ってハーストウッドとキャリーの住まいを訪れ、重婚を解消するシーンが新しく加えられている。ただし、資料⑱では、ジュリアとキャリーが口論してシーンが終わる。これについて、該当シーン（F-7）の端に「仮のもの」というメモが書かれている。

資料㉑の草稿では、ハーストウッドが自身の財産権を放棄し、離婚に同意するまでの実際の映画に類似した内容へ変更されている。ただし、離婚に同意したハーストウッドに対するジュリアについて、「ジュリアはオブライアン（弁護士）に向かって、表情に勝利の僅かな笑みを浮かべながら、その同意に頷く」と描写している。ジュリアは実際の映画で笑みを浮かべていないことを考慮に入れると、草稿段階では、より辛辣な登場人物としてジュリアが想定されていたことがわかる。この点については、MPAAに提出される直前の資料㉒の最終稿で修正され、離婚の同意に笑みを浮かべる描写が削除されている。このように資料⑰から資料㉒までのプロダクショ

ン・コードの検閲を経る前の段階では、既にプロダクション・コードが問題とした重婚の問題について、事前に問題を把握していたかのように一定の修正を図っている。

パラマウント社は、資料⑫の手紙でMPAAに『シスター・キャリー』の検閲を依頼している。この手紙では、ワイラーから添付された資料が妾の物語である必要性を説明していることを伝えている。資料⑫には、この補足資料が含まれておらず、ワイラーの説明を確認することができない。しかしワイラーは、少なくともMPAAに脚本を提出した際に、妾となるキャリーが検閲の障害になることをある程度予想していたように思われる。

資料⑬の検閲結果は、重婚の問題について言及している箇所がなく、姦通と婚外交渉だけを理由にプロダクション・コードの侵害を通告している。そして、続く段落でこの作品が完成する可能性を示している。以下は、資料⑬からの引用である。

しかしながら、我々は、必要な「道德の声 (voice for morality)」とさらなる道德的価値を物語に付け加える方法が見出されれば、この脚本が救われると感じている。

プロダクション・コードが必要とした「道德の声」は、『黄昏』にのみ適用された解決策ではない。たとえば、本作と同じドライサーの小説を原作とした1951年の『陽のあたる場所』に対する検閲でも、中絶の描写を含む脚本に対して「道德の声」が求められた⁽⁸⁾。本作においても特定の登場人物が観客に正しい道德を説くことが求められたのである。

続けて資料⑬は、脚本に加えられた新たな登場人物フィッツジェラルドと主人公のキャリーをこの「道德の声」として活用できるのではないかと提案している。特に、キャリーがフィッツジェラルドから助言を受けてドルーエとの別れを決心するように変更すること、キャリーの悲劇の原因となる登場人物として同棲するドルーエを描くことを例に挙げている。

『黄昏』のフィッツジェラルドは、原作小説に登場しない人物であり、資料⑰から資料⑳までの全ての脚本資料に登場している。しかし映画の最終版でキャリーがフィッツジェラルドの助言を受けることはなく、MPAAの修正案は採用されていない。唯一この二人が会うシーンは、店から帰宅しようとするフィッツジェラルドがキャリーの乗る馬車に誤って乗ってしまうシーンのみである。

一方、ドルーエは、MPAAの修正案が採用され、キャリーの悲劇を作り出す登場人物として修正された形跡が見られる。特に脚本上で「褐色砂岩を貼った中産階級の建物」と設定されたドルーエの家の前でキャリーと話し合うシーンは、修正の産物と言える⁽⁹⁾。ドルーエは、仕事で長く家を空けることを口実に、キャリーに部屋を無料で貸すことを約束する。だが、すぐに仕事へ戻るために待たせていた馬車にこの場を去るように命じ、この口実が嘘であることを示している。このシーンは、資料⑰～資料⑳までのいずれの脚本資料にも含まれていなかった。資料㉑の

手紙に添付されたと思われる資料⑳でも、該当するシーンの前後にあたるレストランで二人が話し合うシーンとドルーエの自宅での会話シーンが、シークエンス A の12と13のシーンにそれぞれ描かれている。しかし、それぞれのシーンをディゾルブでつなげる指示が書かれており、馬車でドルーエのアパート前に辿り着くシーンが含まれていない。そのため、資料㉓の指摘を受けて修正を加え始め、撮影直前に送付されている資料㉖に添付された脚本で承認を得ることがわかる。

以上のようにワイラーとゲイツ夫妻は、重婚を解消するシーンや道徳の声を担うフィッツジェラルドを事前に加え、さらにドルーエに関する修正案を受け入れてきた。『黄昏』の検閲後の1951年から1953年には、オットー・プレミンジャー監督の『月蒼くして』(*The Moon Is Blue*, 1953) が不義密通を含む描写に抵触しているとして MPPA から指摘を受けている (Fujiwara 143-147)。プレミンジャーが MPPA に対して激しく抵抗した一方、ワイラーは、重婚や妾の問題がプロダクション・コードに抵触しかねないことを事前に認識し、検閲を踏まえた脚本修正を進めていた。

さらに脚本資料を精査すると、MPAA から指摘されていない登場人物についても、検閲に先回りするような工夫が加えられている。キャリアの姉のミニーは、キャリアがドルーエからお金をもらった直後のシーンで、家に納めた食費が工場から支払われた退職金でないことに気づき、故郷に帰るようにキャリアにたしなめる。出所が分からない金を批判するミニーも最終版において、「妾」になりかねないキャリアの不道徳を指摘する登場人物となっている。このミニーのシーンについて、資料㉑の脚本の該当箇所では、「このシーンを通じて、ミニーは真剣かつ正直にキャリアに話しかける。意地悪でもなければ口うるさいわけでもなく、単純に労働者階級 (working class) の貧困の現実を伝えている」と説明している。ミニーについては、検閲の際に注目された登場人物ではない。しかし、MPPA へ提出する以前の段階では、キャリアの不道徳を諷める「道徳の声」を担う人物にしようとしていたと思われる。

しかし婚外交渉や重婚の問題に対して柔軟に対応していたワイラーとゲイツ夫妻は、ハーストウッドの自殺について、資料㉑から資料㉒まで該当シーンを頑なに維持している。次節では、不義密通や重婚の場合と異なり、MPAA の要求に応じなかった自殺の扱いを考察する。

4. 自殺とすれ違い

本章ではまず前節での資料番号を元に、自殺の描写に対する検閲について時系列に則して経緯を整理する。次に実際の映画で削除されたエンディングの概要を資料㉑の脚本を元に考察していく。

まず実際の脚本では、資料㉑を除く全ての脚本資料で自殺のシーンを確認することができる。資料㉑から資料㉒までの脚本は、資料㉑の検閲依頼で提出された脚本ではないが、当初からハーストウッドの自殺を想定していたことがわかる。

資料⑳の検閲結果では、物語のエンディングにおけるハーストウッドの自殺について、他のスタジオに指摘してきた内容と同様に削除するように要求している。この削除は、具体的に自殺に該当するシーンを挙げ、繰り返し削除を要求していることから、かなり重要とみなされていた。ただし、前半部の削除の要求には、自殺の描写を許す条件が記されている。その条件は、「ハーストウッドが「実際に心神喪失の状態に陥り、その結果、自殺が無責任な一連の行動になっていること」である。

これらの指摘を受けた修正稿は、資料㉔と資料㉖の検閲依頼の際に提出されている。そして資料㉕と㉗の検閲結果では、自殺と関連のない数カ所の細部の訂正を除いて「プロダクション・コードの定則に合致している」と認められていることから、この段階でハーストウッドの心神喪失を加える修正がMPAAから認められたと思われる。資料㉑の自殺のシーンは、日付が1950年10月27日と記載されており、最後にMPAAから受けた検閲の二ヶ月後に執筆された。

ニューヨーク公共図書館パフォーミング・アーツ分館には、1950年8月20日から1950年11月2日までに実施された『黄昏』の撮影記録が所蔵されている⁽¹⁰⁾。この資料によると、最終版のエンディングの後にあたるシーンは、1950年10月12日から11月2日までに撮影されている。自殺のシーンにあたる箇所は、脚本が修正された日付の10月27日にも撮影が行われており、撮影に入る直前まで脚本の修正が続けられていたことがわかる。この10月27日に修正された自殺のシーンは、MPAAへ提出された記録が残されていない。ただし資料㉔と㉖で送付された脚本がMPAAに認められており、MPAAを完全に無視したと言い切ることはできない。

資料㉓の試写上映の結果では、「全般」「職業」「人種・国籍」「飲酒」「犯罪」「社会学的要素」の項目に細分化され、完成した作品を詳細に精査している⁽¹¹⁾。この映画で描かれる「犯罪」の種類に関する調査結果は、「重婚」「重窃盗」「自殺」となっており、試写段階で「自殺」の描写があったことがわかる。そして、この件について再び手紙などで抗議や修正案の提示がなされることはなく、資料㉑で試写と同日に検閲が認可された旨が通知されている。

試写結果が検閲の認可を受けたことを踏まえると、自殺の描写は、脚本の事前検閲を通過していないバージョンでありながら、MPPAから認可を受けていたことになる。その要因の一つは、MPAAが提案したハーストウッドの心神喪失の描写を加えたことにあるだろう⁽¹²⁾。

実際に想定されていた自殺を含むシークエンスとは、どのようなものであったか。以下は、資料㉑の撮影直前に修正された撮影稿を元にまとめた、現在のエンディングの後に位置するシークエンスHのシーン20～32までの概略である⁽¹³⁾。

H-20 劇場前の通り。キャリーが物乞いにハーストウッドの行き先を尋ねる。

H-21 簡易宿泊所。ハーストウッドがやってきて部屋を頼もうとするが、気に入らずに簡易宿泊所を出てしまう。

- H-22 簡易宿泊所前の通り。ハーストウッドは別の簡易宿泊所の看板を見つけ、「暖炉と水道25セント、ガス灯10セントの別料金で」という文章を読んでその場を去る。
- H-23 パン屋の前。ハーストウッドはパンを見るが、買うこともなく去ってしまう。
- H-24 簡易宿泊所。キャリアが先ほどハーストウッドがいた簡易宿泊所に着き、パン屋へ向かったことを知る。
- H-25 パン屋の前。キャリアが店に並ぶ行列を見つめるが、その中にハーストウッドはいない。キャリアは乗ってきた馬車に再び戻る。
- H-26 別の簡易宿泊所。ハーストウッドが部屋をとる。
- H-27 簡易宿泊所の部屋。ハーストウッドが部屋に入り、ガス灯を点ける。
- H-28 パン屋の前。H-25と同じ場所に馬車がある。馬車の中にいるキャリアは引き続きハーストウッドを探している。
- H-29 簡易宿泊所の部屋。部屋でくつろぐハーストウッド。自身のコートをドアの隙間に挟み込み、ドアに鍵をかける⁽¹⁴⁾。ガス灯を消して、点火することなくガス灯の栓を開く。
- H-30 ハーストウッドのいる簡易宿泊所の前。キャリアはハーストウッドに気づくこともなく通り過ぎてしまう。
- H-31 簡易宿泊所の部屋。ハーストウッドはベッドに横になった状態で窓の外を見る。窓の外に霧が立ちこめ、電車が通り過ぎていく。
- H-32 通り。霧の中にハーストウッドを探すキャリアがいる。キャリアは、ハーストウッドを探して警官に声をかけるが、見つからない。

まず自殺の場面に該当する H-29と H-31では、原作と同様のガス自殺をすべく、ハーストウッドが準備している⁽¹⁵⁾。H-22でハーストウッドが見かける看板や、H-27でガス灯を点けるハーストウッドも、このガス自殺を想定して描いていたことがわかる。

一方、H-31の場面では、ハーストウッドがベッドに横たわり、窓の外を眺める姿を描き、エンディングを迎えていることから、ハーストウッドの死自体を明確に描いているわけではない。また、最後までキャリアがハーストウッドを探し続けることも、彼女が男を救う可能性を残しているとも言えるだろう。ハーストウッドとキャリアのすれ違いは、男女のロマンスの成就というハッピー・エンディングの否定であると同時に、あえて結果を描かないことでラスト・ミニット・レスキューの余地も残している。そして、死の間際にあるハーストウッドを探し続けるキャリアの姿で終わることで、ハーストウッドの死を明示しないことに成功している。

次にハーストウッドの心神喪失については、H-23のパン屋のシーンに注目すべきだろう。ハーストウッドは実際の映画において、路上で物乞いをするシーンで「喰わないと死ぬ」と独り言を呟き、次のキャリアと再会する劇場裏のシーンでも「空腹なんだ」と語りかける。ところが

H-23では、ハーストウッドの空腹と矛盾するようにパン屋でパンを受け取らない。ハーストウッドの空腹を巡る発言と行動の矛盾は、食事を絶つことによる死の決意と同時に、生きるために必要な食事にすら無関心となった心神喪失の状態を示している。

以上のように、『黄昏』の脚本は、ハーストウッドの自殺を明確に方向付けながら決定的な死の描写を避け、ハーストウッドの心神喪失を明確にする修正を加えていた。試写の際に「自殺」の項目に抵触していたとしても、MPPAの指摘を可能な限り反映していたことが認可の決め手となったといえる。

しかし、自殺のシーンが削除されたことは、検閲以外の要因によるものだった。自殺を含むこれらのシーンは全て、ハーストウッドとキャリーのすれ違いのために作られている。むしろハーストウッドが向かっていく自殺は、キャリーとすれ違う感傷を増幅させるために機能しているだけであり、すれ違う男女の主題にとって副次的な要素に過ぎない。ワイラー不在の中で編集を進めたパラマウント社は、表現としての自殺を削除したのではなく、ハーストウッドとキャリーにとって決定的なすれ違いを削除したのである。そのように考えると、自殺の削除は結果的に、メロドラマとしての『黄昏』にとって重要な要素を捨て去っていたといえる。ワイラーが本作を「失敗作」と位置づけた真の要因はここに集約されるだろう。

5. 結 論

本論は、『黄昏』におけるプロダクション・コードの影響を考察し、婚外交渉や重婚、自殺の扱いについて脚本生成過程で修正を促してきたことを明らかにした。ワイラーは、プロダクション・コードの影響で困難とされた原作の映画化を、MPAAの修正を受け入れて実現した。それにも関わらず、赤狩りを考慮に入れたパラマウント社は、作品の肝となる終盤部分を削除してしまった。

おそらくパラマウント社がワイラーの同意を得ずに自殺を含むシークエンスを削除した背景には、第2節で確認したユニバーサル社の検閲結果に対するPCAの反応も強く影響しているだろう。自殺それ自体を含まなかったことでPCAの評価を受けたユニバーサル社の検閲結果は、「不道德」を避けながら上映を成立させるための、安直な解決方法をパラマウント社に示すものだったかもしれない。

一方、ワイラーが想定していた男女のすれ違いというエンディングは、ジャンルとしてのメロドラマを明確にしようとしていた意味で重要である。そこで最後に、自殺の描写と同時に削除された作品の終盤部分のすれ違いの主題を中心に、改めて考察していきたい。

メロドラマ映画におけるすれ違いは、当時の映画に独特な特徴ではない。たとえば『邂逅』(Love Affair, 1939)とそのリメイクとなる『めぐり逢い』(An Affair to remember, 1957)では、男女がまさにロマンスを成就させようとする直前に交通事故が起り、これによるすれ違いがロ

マンズの成就を引き延ばす。さらにマーヴィン・ルロイ監督の『哀愁』(Waterloo, 1940)は、作品終盤でヴィヴィアン・リー演じるマイラが軍用トラックに飛び込んでしまう自殺によって、男女の永遠のすれ違いを描いている。マイラの自殺を曖昧にする群衆の描写やロンドンの霧の演出など、『黄昏』のエンディングの演出と類似する点も多い。

『哀愁』において、ロバート・テイラー演じるロイとマイラのすれ違いを引き起こす主要因は、第一次世界大戦という時代と、マイラとロイの階級差である。バレリーナの職を失い、恋人のロイの戦死という誤報に絶望し娼婦に身をやつすマイラは、戦場から戻ったロイとの生活に隔たりを感じるようになる。ロイと共に過ごす上流階級の生活が娼婦の頃とあまりにもかけ離れた階級差に、娼婦であった自分を恥じ、ついにロイの元を離れてしまう。

『黄昏』のキャリアとハーストウッドも、『哀愁』のマイラと同様に、階級に翻弄される。キャリアは、第3節で確認したような労働階級の貧困を説くミニヤ、中流階級のアパートに住むドルーエといった細部の描写に明らかなように、労働階級であるがゆえの苦難に晒される。一方、ハーストウッドも、上流階級たろうとする妻ジュリアとのすれ違いを重ねることで、自身の階級的凋落を逆照射するように浮き彫りにしていく。そして波止場でハーストウッドが彼の息子と再会しようとするシーンは、かつての家族との階級差を明らかにする。

直前のシーンで息子がシカゴの上流階級の娘と結婚し、ニューヨークの港にやって来ることを知ったハーストウッドは、波止場で船から新婚の妻を伴ってやってくる息子の姿を見つける。だが、ハーストウッドの息子は、上流階級である妻の両親との再会を喜ぶ。妻の両親の歓迎を受ける息子を見たハーストウッドは、父親としての自分が不要であることに気づき、自分を恥じて息子と再会を果たせずに去ってしまう。

ハーストウッドは、彼の息子が上流階級の義理の父親と握手する姿を目撃することで、階級によって息子と隔てられてしまったことに気づく。息子との再会を果たせないこのシーンでハーストウッドの父性の喪失を補強しているのは、まさに階級差なのである。

こうして階級に翻弄されたハーストウッドとキャリアも、子供を巡るすれ違いを引き起こす。キャリアはハーストウッドが息子と幸せな生活を営めるといふ勘違いでハーストウッドの元を去り、ハーストウッドは上流階級の家族との生活を犠牲にして得たキャリアとの生活を失う。そして最終版のエンディングでキャリアとハーストウッドが再会する時、俳優として上流階級として栄達したキャリアと、浮浪者として落ちぶれたハーストウッドという形で、再び階級差が彼らを隔てている。このように考えると、本作で削除されたエンディングにおいてすれ違う二人は、階級差が引き起こすメロドラマという本作の主題をより鮮明にするためにあったと言えるのではないか。

そして実直な上流階級から最下層の階級である浮浪者にまで凋落し、死を迎えてしまうハーストウッドは、アメリカの階級社会を批判しかねない登場人物であったのかもしれない。そして、

赤狩りの当時において急進的な反共主義者たちが、愛国的ではない映画と主張する可能性も、まさにこの階級の表象があったからこそであろう。

『黄昏』における階級の表象は、プロダクション・コードにおいて不道德とみなされなかった。他方、赤狩りの時代においてこの表象が含まれていた自殺の描写は、「不道德」とみなされる可能性を孕んでいた。その可能性が『黄昏』というメロドラマ映画の決定的なシーンの喪失へつながったことは、歴史の悲劇と言うほかない。だが、それでもなおハーストウッドとキャリアのすれ違いを描こうとしていた事実は、メロドラマ映画を目指して、プロダクション・コードが拒絶してきた題材に挑戦した作品の痕跡を残している。そして、この痕跡が示したように、すれ違いのメロドラマ映画として本作を再評価することができるのではないか。

注

- (1) 『シスター・キャリア』は、1900年に刊行された際、原作に含まれた不道德な描写がきっかけとなり、いくつかの問題を引き起こしている。以下では、原作の出版過程における自主検閲と出版の過程を、『セオドア・ドライサー事典』を参照して概観する。

ドライサーは1900年4月、初めて書き上げられた『シスター・キャリア』を、教養雑誌『ハーパズ・マンスリー』に送付した（ニューリン 229、以下は頁数のみ記す）。ドライサーの初稿に対して、この雑誌を出版するハーバー・アンド・ブラザーズ社は、文体の不統一・内容の卑猥さを理由に出版できないとドライサーに伝えている。具体的には、未婚の若い女性が性的関係を持ちながら、罰されもせずに終わるというあらすじが若い読者に不向きとされた（69）。その後、ドライサーは、原稿の3万語以上を削除し、露骨な性的表現を抑えた上で、設立間もないダブルデイ・ページ社へそのタイプ稿を送付することになる。

ダブルデイ・ページ社では、社内の肯定的評価を受けて6月に口頭で出版を約束するが、後にその契約を反故にしようとする（121-123）。この事件は、社主のフランク・ダブルデイの妻であり社会奉仕家でもあったダブルデイ夫人が小説を読んで気に入らなかったという逸話を生みだしている。ダブルデイ・ページ社は、書き直された原稿を11月に出版したが、社のカタログに掲載せず、書店や文学雑誌への広告投稿も行わず、印刷した1008冊のうち450冊を製本しない、などと事実上の黙殺と呼べる処置を進めていく。

1901年7月に縮約版の『シスター・キャリア』を英国で出版したウィリアム・ハイネマンは、作品の話題を広めるべく、ダブルデイ夫人がこの作品の「禁書」に荷担したという逸話を広めることで、作品への注目を集めて売り上げを伸ばしていく。ダブルデイ夫人の逸話は、原作が同時代の道徳を揺るがす作品であったことを窺わせる。当時、次々と男を変えながら出世していく労働階級の女主人公は、存在を知るだけでも害悪とされるような「不道德」な女性とみなされた（渥美 218）。

この結果、『シスター・キャリア』の小説には複数のバージョンが存在する。主に1907年に出版され普及したドッジ社の新版、1969年にファクシミリ版で出版された初版、1970年に初版へ多数の注釈や批評を加えたノートン版、1981年に原稿から初版を作る際に削除された約三万六千語を復元したペンシルバニア版が存在する（大浦 iii）。本論では、初版を底本に様々な注釈を加えて1997年に出版された岩波文庫の村山淳彦訳を参照した。

- (2) ウォリックは当初、ジュリア役に予定されていたが、後にミリアム・ホプキンスに変更された（Herman 327）。
- (3) ブレナンの引用文献リストを参照すると、第2節で扱った資料のうち、⑥と⑬の日付と宛先名が一致しており、本論と同じ資料を閲覧していることがわかる（Brennan 204）。
- (4) 本論文では、マーガレット・ヘリック図書館（Margaret Herrick Library）の所蔵資料をまとめたマイクロ

フィルム *Hollywood and the Production Code* (2006) を参照している。このマイクロフィルムは立教大学池袋図書館に収蔵されている。なお、資料閲覧に際して、山本祐輝氏のご協力とご助言をいただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

- (5) 同条文は、トーマス・ドハーティが収録した1956年の条文 (Doherty 351-363) を参考に、該当箇所における条文内容が資料記載の内容と訳文において同一であることを確認した上で、加藤幹郎による訳文 (加藤 160-174) から引用した。
- (6) 正確には「映画内の犯罪に関する特別規則」の第5項に同じ文章が記載されている (Doherty 355)。なお、1951年に修正された自殺に関する規約は、「(自殺は) 法に帰されるべき過程を無効にするために、正当化されたり、賛美されたり、使われるべきものではない」と表記している (Doherty 300)。
- (7) パラマウント社のルカスチによる検閲については、加藤幹郎の『映画 視線のポリティクス 古典的ハリウッド映画の戦い』を参照 (加藤 37-52)。同書によると、ルカスチの役職名は1940年の段階で「法律調査部担当」となっている。
- (8) 『陽のあたる場所』の検閲記録もマイクロフィルム *Hollywood and Production Code* (2006) に収録されている。とりわけ本論文では、1949年9月30日と11月14日に送付された検閲結果を参照した。9月30日の検閲結果は、主人公ジョージと、ジョージの子を妊娠してしまうアリスの関係について、「道徳の声 (a voice for morality)」が必要であると提案している。そして、11月14日の検閲結果では、アリスを診察する医者に、「婚外子とその母親を支援する制度」について説明させるように修正を促し、そのことで中絶の話題を避けられると示唆している。その結果、最終版は、夫になっていないジョージとの子を妊娠したことについてアリスが医師に伝えるシーンで、母子を支援する制度を助言する医師を描いている。そして医師が厳しい表情でそれ以外のことができないと断言することで、中絶の話題を避けることに成功している。
- (9) 資料⑩の31頁に「褐色砂岩を貼った中産階級の建物にあるドルーエの部屋」と記されている。
- (10) 第3章の資料⑫には、8月21日の月曜日に撮影を開始する旨の連絡がなされているが、撮影時の記録は8月20日から始まっている。おそらく既に承認を得ていた箇所から撮影を先行して開始していたものと思われる。
- (11) ハーマンによれば、ワイラーが本作の最終編集を終えたのは1951年3月である (Herman 330)。資料⑩の日付が1月であることを踏まえると、最終編集を終える前のバージョンが試写されたことがわかる。
- (12) 他の資料は、自殺の描写について、過去の検閲事例を参照した可能性を示している。この関連資料については、文末の付録に収録した。
- (13) 自殺を含むシークエンスは、決定稿でシークエンス F と記載されているが、撮影記録でシークエンス H と記録されている。だが、撮影記録に記入された脚本内容の概要が決定稿と同一であることを確認していることから、本論は決定稿の表記に従っている。
- (14) 自殺のためにドアの下に敷き詰めるものは、当初新聞紙であった。だが、第3節の資料⑬で MPPA が新聞紙を削除するように求めていることから、着用していたコートに変更したと思われる。
- (15) 撮影記録によると、ハーストウッドが部屋に入って自殺する準備をする H-27 と H-29、H-31 は、10月27日にロングテイクで撮影された形跡が残されている。このショットの撮影回数は12テイクを記録している。なお本作の撮影記録には、2テイクで終了するショットから20テイクを超えるショットまで存在していることから、比較的テイク数が多いショットであったことがわかる。

参考文献・引用文献

- Anderegg, Michael A. *William Wyler*. Twayne Publishers, 1979.
- 渥美昭夫「リアリズムと自然主義の文学」、大橋健三郎他編『総説アメリカ文学史』、研究社、1975年、217-224頁。
- Brennan, Stephen. "Sister Carrie becomes Carrie." *Nineteenth-century American Fiction on Screen*, edited by R. Barton Palmer, Cambridge UP, 2009, 186-205.
- Churchill, Douglas W. "Ruth Warrick Tested for Role in 'Citizen Kane'—Wyler May Direct 'Sister Carrie'" *The*

プロダクション・コードと『黄昏』における不道德の表象

New York Times, 17 June 1940.

Doherty, Thomas. *Hollywood's Censor: Joseph I. Breen & the Production Code*. Columbia UP, 2007.

ドライサー、セオドア『シスター・キャリア』、村山淳彦訳、上・下巻、岩波文庫、1997年。

Fujiwara, Chris. *The World and its Double: The Life and Works of Otto Preminger*. Faber and Farber, Inc., 2008.

Herman, Jan. *A Talent for Trouble: The Life of Most Acclaimed Director, William Wyler*. G.P.Putnam's Sons, 1995.

石垣弥麻「『シスター・キャリア』の映画化とその位置づけ」、中央大学ドライサー研究会編『〈シスター・キャリア〉の現在 新たな世紀への読み』、中央大学出版部、1999年、97-116頁。

加藤幹郎『映画 視線のポリティクス 古典的ハリウッド映画の戦い』、筑摩書房、1996年。

河野真理江『日本の〈メロドラマ〉映画 撮影所時代のジャンルと作品』、森話社、2021年。

ニューリン、キース編『セオドア・ドライサー事典』、村山淳彦訳、雄松堂出版、2007年。

大浦暁生、序文、中央大学ドライサー研究会編『〈シスター・キャリア〉の現在 新たな世紀への読み』、中央大学出版部、1999年、pp.i-iii。

Sinyard, Neil. *George Stevens: The Films of a Hollywood Giant*. McFarland & Company, Inc., 2019.

高村勝治「人と生涯」、高村勝治編『ドライサー』、研究者出版、1967年、1-40頁。

付 録

UCLA スペシャル・ライブラリーには、『黄昏』製作に際して、ジェニファー・ジョーンズの手配 (arrangement) として作品に参加したデイヴィッド・O・セルズニックからワイラーへ送付された膨大な手紙が含まれている。セルズニックは、資料④の検閲依頼が送付された直後の1950年8月1日、『黄昏』における自殺の描写について、ワイラーへ手紙を送付している。

セルズニックは手紙で以下のように述べている。

私は、コードで問題となった自殺について、あなたが執着しないことを心から希望している。私の意見を述べれば、自殺に対していかなる検閲があるとも思えないし、いわゆるいくつかのコードの問題は、コードを管理する基準となる定則に適切に基づいていない。自殺自体は、必ずしも除外されない。例として『スタア誕生』を挙げれば、感覚的にもその他の点においても良い比較例になるだろう。

セルズニックは、この手紙で自身が製作した『スタア誕生』 (*A Star Is Born*, 1937) を例に挙げて、プロダクション・コード下において自殺の描写が大きな問題とならないことをワイラーに説明している。そして続く文章で、自殺を含むシーケンスが「これまで読んだ脚本の中で最も感動的なシーケンス」の一つだったことを明らかにし、「僅かな修正で克服できると確信する」と自身の見解を述べている。

『スタア誕生』では、フレデリック・マーチ演じる主人公のノーマン・メインが飲酒をきっかけに自暴自棄に陥り、最終的に海に身を投じて自殺に及ぶ。しかし、海に身を投じた直後のシーンで、「事故」として扱われる新聞記事をクローズアップで強調するなど、自殺を曖昧にする工夫が凝らされていた。セルズニックが提案する「僅かな修正」とは、おそらく自殺の描写を曖昧にする余地を『黄昏』に作り出すことなどを念頭に置いていたのだろう。

セルズニックはこの他にも、便箋29枚に及ぶ長大な脚本に対する提案や、『黄昏』のプレミア公開の上映館の交渉など、膨大な手紙をワイラーに送付している。『黄昏』の脚本執筆が始まる1949年に主演のジョーンズと再婚していることから、妻の出演作品に対する関与を強めていたと推測される。本作の正式なプロデューサーではないが、製作に関与していた可能性を否定できないため、今後さらに考察を進める必要がある。